



# 宮農情報

第37号 平成27年7月7日

## 「あまおう」7月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t以上を目指しましょう

### <今月の目標>

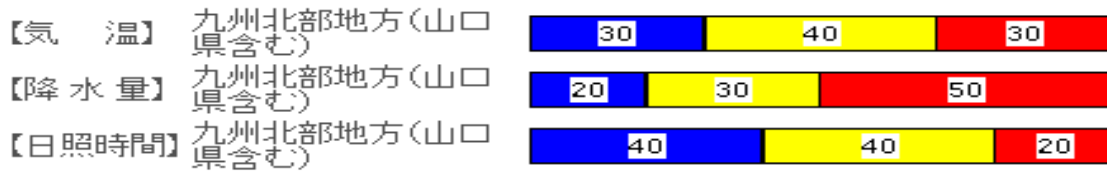
- ◇ 作型に合わせた充実した苗づくり(肥料切れ、根傷みに注意！)
- ◇ 病害虫の早期発見、早期防除
- ◇ 土づくりの実施と定植床の準備に向けた計画的な作業の励行
- ◇ 土壌消毒の徹底

5月下旬の乾燥、6月に入っての低温等でランナーの発生が遅く、子苗数の確保が懸念されました。現在では日照不足で徒長傾向ですが、概ね子苗数も確保されています。

さし苗作業は6月中旬でほぼ終了しており、すけポットは断続的な降雨により、病気の発生が懸念されるため切り離しがなかなかできないほ場が見受けられていますが、6月中下旬が切り離しのピークです。

病害虫では「うどんこ病」及び「ハダニ類」の発生が多く見られます。また、今年度は梅雨入れも早く、降水量も多くなっています。そのため「炭そ病」及び「疫病」の発生には十分注意が必要です。今のところ大きな被害は見られていない状況ですが、定期的な薬剤防除や感染株の早期発見(見回りを多く)・早期排除(疑わしい株は排除)に努めて下さい。

### <向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

平成27年7月2日 福岡管区气象台 発表

## 1 作型の考え方

下記作型を参考に、計画的な育苗を行ってください。

作型 (予冷库利用)	定植予定日	入庫時期	陽光 処理	定植時の分化程度
株冷	9月12日～ 9月15日～ 9月19日～	8月20日 8月23日 9月1日	3回 2回 1回	分化～ガク片形成 分化～ガク片形成 分化
夜冷	9月10日～ 9月15日～	8月18日 8月23日		分化～ガク片形成
自宅株冷の2回目処理 (10日間程度処理)		9月19～22日		分化
普通ポット 普通ポット(厳寒期安定出荷)		9月20～25日 9月26～28日		肥厚後期

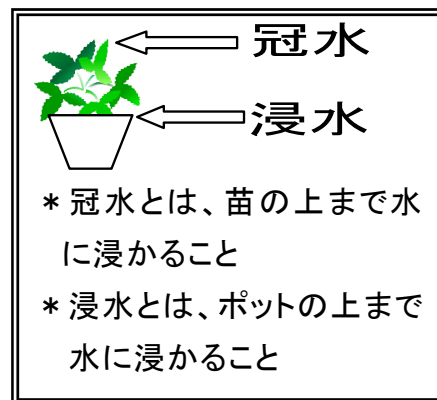
- ◆鉢上げが遅れたり、根傷みなどで生育が遅れた(クラウン経8mm未満)場合や病害の発生がみられる(炭そ病、うどんこ病)場合は、無理に早い作型にせず、良い苗に仕上げることを優先してください。
- ◆自宅株冷の2回目処理(短期株冷)は、普通ポットよりも花芽分化が遅くなる可能性があります。

## 2 育苗管理

### (1) 浸水・冠水対策

梅雨時期は局地的な集中豪雨が発生しやすく、特に満潮と重なると有明海沿岸地帯は、浸水・冠水する恐れがあります。大雨が予想される場合は、事前に育苗床の排水対策(溝の設置や排水ポンプの準備など)をしておきましょう。

- 基本的に、浸水・冠水する恐れがある場所で育苗しない。
- 冠水した苗は使用しない。
- 浸水した苗は水洗いした後、「炭そ病」の防除を行い、ポットは乾かし気味に管理する。
- 降雨後、急速に晴れ上がるような時は寒冷紗で被覆し、葉かぎ作業は根が回復してから行う。



### (2) 肥培管理

充実した苗作りに向けて、適正な肥培管理を目標にしますが、「炭そ病」の危険性がある場合は、窒素過多にならない管理を徹底して下さい。

- 活着したら追肥(置き肥)を開始する。
- 活着後、2回程度液肥を施用する(例:OK-F-1で1,000~1,500倍)。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。
- 育苗後半の極端な肥料切れは、花芽分化の遅れの原因となるので注意する。

施用例	6月下旬	⇒	7月中旬(追肥)	
	IB化成で 1~2粒/鉢		夜冷・株冷Ⅲ型 :IB化成1粒/鉢追加 上記以外の作型 :IB化成1~2粒/鉢追加	

(注意)置肥の肥効は気象条件によって変わります。3寸ポットの株冷Ⅲ型・Ⅳ型・Ⅴ型の最終追肥(液肥のかん注)時期がそれぞれ8月5日・8月10日・8月15日であることを考慮して施用するようにして下さい。

※今年は雨が多いため、培土肥料が切れて葉色が薄くなっているほ場が見られますので、早めに追肥を行って下さい。

### (3) かん水

「あまおう」は湿害に弱いため、過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態(根の状態)を常に観察してかん水を行って下さい。

- 活着後は朝主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は、葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、少量多回数かん水を心がける。
- 培土が乾かない場合は、排水不良又は根傷みが生じている場合もあるので注意する。

#### (4) 葉かぎ

- 葉かぎは、活着後根が十分にまわってから開始する。
- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉数は最初は徒長防止のため2.5～3枚に、それ以降は3～4枚を確保する。(ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。)
- 生育不良時や降雨直前、雨天時には摘葉しない。
- 摘葉作業直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う(傷口からの感染防止)。

#### 【最終の摘葉時期の目安とその時の葉数】

株冷	入庫10日前に3～3.5枚
夜冷	処理開始直前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3～3.5枚

### 3 病害虫防除

- 農薬の使用回数は、親株から切り離してからカウントされます。
- ローテーション防除表を参照して、予防散布に心がけて下さい。
- 薬剤散布は早朝散布を基本とする。(高温時は薬害発生のリスクが高まる)

#### 炭そ病

##### 「炭そ病」は、病原菌が雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病します

- 「炭そ病菌」は濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。
- 定期的(出葉に応じて1週間間隔)な農薬散布(特に降雨前後)を徹底する(ローテーション防除表参照)。降雨が連続する場合も、雨の合間をみて農薬散布を行う。
- 葉に病斑を確認した場合除去し、その周辺1mの株も除去する。
- 排水溝の整備など、育苗床の排水対策を十分に講じておく。
- ポット間隔をできる限り広くとる(18cmの間隔を確保する)
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い(特に梅雨期)。ただし、換気に心がけ、過湿にならないよう注意する。
- 窒素過多は発生拡大を助長するので、過剰な追肥は控える。

#### うどんこ病

##### 「うどんこ病」の症状がある苗を入庫しない。

- 病状の進展が早い梅雨期を中心に予防散布を行い、病斑の上位葉への進展を抑制する。
- 不要な下葉を除去した後に、薬剤散布を行う。
- うどんこ病の孢子発芽適温は20℃前後なので、うどんこ病に感染している苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで感染した葉が取り除かれてから、入庫または定植に使用する。(入庫時や定植時に、病徴(赤褐変した病斑も含む)のある葉を除去しておくこと。)

## 疫病

- 梅雨時期～8、9月の高温多雨期に発生が多い。
- 7～8月に薬剤を予防散布する。
- 古葉かぎ等植物体に傷が付く管理は、雨天日及び降雨が予想される前は避ける。

## カキノヒメヨコバイ

- 上位1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 被害の多い7～8月に、定期的な薬剤散布を行う。

## ハダニ類

- 発生が多い場合は、葉の展開が遅れ、苗の生育が悪くなる。
- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。
- 低温処理開始までに必ず防除を行い、ハダニの発生の無い状態で入庫する。

※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に影響の長い農薬の使用を避ける。

## コガネムシ類幼虫

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンSLゾル 500 倍のポットかん注を行っておく。

## 4 本田管理に

ハウス土壌は、雨に十分あてるとともに有機物を十分施用し、8月中旬には定植床の準備が終わるように、計画的な作業を心がけてください。

● 有機物の施用	・前年度の栽培により消耗した土壌有機物の補給 ・これから有機物を投入する場合は、完熟堆肥などの十分に腐熟の進んだ有機物を施用する。
● 雨にあてる	・土壌中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出 ・土壌中の微生物が、大量の雨水で活性化する。
● 土壌消毒	・土壌病害虫(ネグサシセンチュウ、萎黄病)の予防と雑草防除 ・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。 (土壌病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う) ・ガス消毒は、クロルピクリン錠剤・クロピクフロア等がある。 ・ガス消毒は事故がないよう、使用量・使用時期・使用方法に注意する。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!**